

Title	ロオドベルトスの経済学説補遺 (一)
Sub Title	
Author	小泉, 信三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1921
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.15, No.1 (1921. 1) ,p.49- 66
JaLC DOI	10.14991/001.19210101-0049
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19210101-0049

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

りて不_レを確保し、勢力の偏重を抑制するものは此の階級なり。従つて適度に
 合宜なる所有を有するは市民の最大なる幸福なり。統治にして有すること多
 きに過ぐる者、若しくは有すること少きに過ぐる者の手中に存せんか、そは暴虐な
 る煽民政治と爲るか、然らざれば專制的寡頭政治と化するなる可し。而して激烈
 なる民主政治及び倨傲なる寡頭政治は直ちに僭主政治に導くなり。而も其の社
 會の人員が殆んど互に平等なる場合は斯くの如き虞れ遙かに稀れなり。中層階
 級のみ獨り暴動の虞れなし、此の階級の多數なる所に於ては社會を攪亂す可き躁
 暴及び叛亂を生ずること稀なり。而して同一の理由に基きて廣大なる國家は人
 民の蜂起を見ること最も少し。即ち彼れ等に在りては中層階級頗る多數なるが
 故なり。然れども小市は屢々二個の陣營に分割せらる。即ち此處には中層階級
 を残すこと少くして、一半は富有に、他は貧窮なるを以てなり(註)。
 斯くて古き「家計術」と新しき「營利術」とを對立せしめたるアリストテリーは、
 纏がて又た世界の歴史と共に古き貧富間に於ける軋轢の眞因を極めんとせり。
 紀元前第四紀の大思想家の聲は宛も昨日に於て發せられたるが如くに吾人の耳
 に響くなり。

(一九二〇年十二月十三日夜)

ロオドベルトスの經濟學說補遺(一)

小 泉 信 三

(一)

ロオドベルトスの價值並びに分配理論に就ては既に兩回に亘つて其大要を記
 述し、且つこれに多少の論評を加へ試みた。ロオドベルトスの勞働價值學說と平均
 利潤率の問題國民經濟雜誌第二十九卷第三四號所載、ロオドベルトスの地代論と
 リカルドオ三田學會雜誌第十四卷第十、十一號所載。今本篇の専ら主題とするこ
 ころは、遺稿資本論中に於ける彼れの恐慌及び資本學說である。此書は著者の死
 後九年にして、一八八四年 A. Wagner の委託を受けた Theophil Kozak の手で刊行せら
 れたもので、題して「Das Kapital. Vierter sozialer Brief an von Kirchmann von Dr. Carl Rodber-
 tus-Jagetow. Herausgegeben von Theophil Kozak. 2. Aufl. 標題の示す通り von Kirchmann
 宛の第四公開狀として書かれ、一八五〇—五一年に公にせられた第一第二第三書

第十五卷 (四九) 論 説

ロオドベルトスの經濟學說補遺

第一號 四九

簡の續篇となるべきものである。

既述の如く(本誌第十四卷第十號四一—二頁參照) Rodbertus 自ら記すところに依れば、彼れと v. Kirchmann とは次の三點に於て見解を異にする。

(一) v. Kirchmann は農業上の勞働生産率(Productivität)は益々減退し、食料原料の價格は益々騰貴し、從て生産物に對する資本家及び勞働者の分前が益々減少し、又從て最後に、その所得の大部分が食料原料を以て成る階級の貧窮に陥るべきことを主張するのに對して、Rodbertus は農業勞働の生産率の増進を主張する。假に農産物の價格騰貴と云ふ事實が起るとすれば、それを別の原因に由て説明し、農業地代の騰貴なる事實を全く別の原因に歸する。而して一般に貸子 Zins (即ち資本利潤並に地代)は勞働賃銀を犠牲にして増加するもので、勞働者階級の貧窮は食料原料の騰貴に由るものではなくて、生産物に對する彼等の分前の減少に由るものなる事、而して此分前の減少は正に生産物價格の低廉と相伴つて起るものなる事を主張する。

(二) v. Kirchmann が商業恐慌の原因は勞働階級の分前が僅少にして、資本家の過大なる分前に對して、充分の購買者たることを能はざるところに存することを主張するのに對して、Rodbertus は原因を分前の僅小に求めずして、生産率の増進に伴ふ分前の減少に求め、而して假に此分前が現在の如く僅小であつても、その割合が一定して居りさへすれば、恐慌は起らぬであらうし、又此分前が如何に大でも、それが生産率の増進と共に減少すれば、依然恐慌は起るべきことを主張する。

(三)最後に Rodbertus は交易が自由に放置せらるゝところでは、勞働階級は勞働生産率増進の果實から除外せらるゝことを主張し、社會をこれより生ずる病患から救済するには、此状態を改めて、果實の増加に對する均霑を保障するの外なきことを認めるのに對して、v. Kirchmann は Rodbertus が希望することは既に今日實現せられて居る、勞働階級は既に有産階級と共に、生産率増進の恩澤に等しく浴して居ると主張するのである。

Rodbertus は此三問題中の第一をその第三書簡中で説明し、第三の問題には、これも同じく彼れの死後、一八八五年 Kozak の助力を得て Wagner が刊行した Zur Beleuchtung der sozialen Frage. II. Teil を充て、而して Das Kapital に於ては第二の問題に解答

を與へようとしたのである。彼れは此書に於て v. Kirchmann との意見の相違を段々に推し究はめて行つて、結局恐慌は果して資本家の貯蓄或は節約 (Sparen) の爲めに起るか何うかと云ふ問題に逢着する。而して節約の概念其者を明かにする爲め、彼れは進んで資本の本質を論究しようとした。是より先き一八六七年 Marx の資本論が公にせられたが、Rodbertus に従へば、此書には部分的卓見と甚しき誤謬とが同時に含まれて居た。「一般に此の Marx の書は資本に關する研究と云ふよりも、寧ろ今日の資本形態に對する論難である。これを彼は資本其者と混同し、而して其處から彼れの誤謬は生ずる」のである。(Briefe und socialpolitische Aufsätze von Dr. Carl Rodbertus Jagetzow. Herausgegeben von Dr. Rudolph Meyer. S. 111 ff.) 而して「資本概念は、人が其眞内容を二つの異つた社會状態 (Weltzustände) 即ち未だ人間所有の行はれた古代、土地及び資本私有の行はれて居る近世、及び所得所有のみが行はるゝ理想的状態に照して點驗せざる限り、之を明確にすることは出来ぬ。それ故にのみ自分は、一切の關係に於ける資本内容を古代に就ても亦知らんが爲め、過去十年間に於て、古代經濟の研究に突進した。凡そ人は比較に依てのみ學び得る。予の「資本

論」に於て自分は此根本思想を追尋するのである」と彼れは云つて居る。(v. a. O. S. 99 ff.)

(二)

恐慌の原因は、勞働階級所得分の僅少其者に在るのではなくて、全國民生産物に對する勞働階級得点が、勞働生産力の増進に連れて減少することに存すると云ふ、Rodbertus の學說を了解するには、先づ其反對論者たる v. Kirchmann の說を知る必要がある。v. Kirchmann は一例を假設して自說を證明しようとする。

茲に一の村があつて、村民は其の一切の欲望を凡べて村内の生産に依て充足して居る。而して其生産には(一)衣服(二)食物、燈火、燃料(三)家屋、家具、道具生産の三種があつて、此三種の生産業は、各々一人の企業家と三百人の勞働者とから成立つて居る。而して勞働者は、何れの場合にも、其年産物の半分を賃銀として受け、残る半分は、資本に對する利子並に企業利潤として、企業家の手に收められるものと何れも假定する。即ち此村には九百三人の住民があつて、自給自足を行つて居る。衣服生産業の企業家は、その三百人の勞働者を以て、全住民(九百三人)の爲めに衣服を供

給することが出来、食料燃料燈火生産の企業家も亦その三百人の労働者を以て、九百三人の爲めに是等の必要物を供給することが出来る。同じことは家屋家具道具等の製作を率る企業家に就ても云はれ得る。さうすると此村では、全住民が幸福に生活すべき、凡べての條件が備つて居る筈である。然るに少しく時日を経過して見ると、事態は全く豫期に反して居ることが明になる。それは、正に今日の現實世界に於けると同じく、九百人の労働者は窮乏に困しみ、三人の企業家は、其倉庫に充滿する、賣捌けない生産物の爲めに惱まされると云ふ事實が起つて来るからである。此事實は何の原因から生ずるか、と云へば、それは生産物が全ての者に均等に分配せられずして、企業家は利子及び利潤として全生産物の半分を收め、僅かに残る半分を労働者に分與するからである。即ちこれが爲め、例へば衣服製造労働者は、其生産物を以て、僅かに他の二業の生産物の二分一を丈けしか購ふことが出来ぬ。それと同時に企業家は、其の手に收めた残る二分一を賣捌くことが出来ぬ。何となれば、労働者は誰れも最早それと交換すべき生産物を持つて居ないからである。企業家は其貯藏品を如何にすべきかを知らず、労働者は其飢餓と欠乏

とを如何にすべきかを知らないのである。

要するに此の窮乏と過剰との併存は分配の不平等から生ずる。

然乍ら此假定は、現實の世界とは二つの點に於て相違して居る。即ち此村には奢侈と外國貿易とが行はれて居ないことがそれである。そこで、前の假定では生活必需品のみが生産された爲めに、その半分を利子として收得する企業家は、それを自ら消費することが出来ず、又これを消費し得る九百人の労働者には、それを購ふ可き資力が無いと云ふ結果に陥つたが、今全労働者の半數をして、必需品の代りに贅澤品を生産せしめたならば、企業家の手許に於ける不捌貨物の堆積と云ふ事實は、消滅すべき筈と考へられる。そこで従來三百人が従事して居た衣服生産業には、僅かに百五十人丈けを當らせ、残る百五十人と、それに相當する資本とは、これを贅澤物の生産に轉用し、他の二生産業に於ても同じ事が行はれたものとする。さうすると九百人の労働者が、窮乏の生活を營むことは、前の場合と少しも變りはないが、今度新たに、四百九十人の労働者が生産する贅澤品は、三人の企業家が自ら消費し得るものであるから、彼等は最早不捌貨物の堆積の爲め、苦しむには及ばな

いのである。(v. Kirchmann は謂ふ)。

これに對しては現實社會には既に奢侈が行はれて居るのに、それにも拘らず販路壅塞商業恐慌の起る事實があるのは何故であるかとの疑問が起る。v. Kirchmann は之に答へるに、それはまだ奢侈が不充分だから *weil noch zu wenig Luxus vorhanden ist* を以てするのである。彼れは此理を再び其假設例に依て説明しようとする。今企業家が其収入を贅澤品の爲めに消費し盡さずして、その一部分を生産的に消費したならば、即ち例へば、三人の企業家が僅かに百人の労働者の生産物を自ら消費するに止め、残る三百五十人の労働力を、その使用資本と共に新生産業の起設に投じたならば何うなるかと云ふに、二の場合が考へられる。第一はその新たに起す生産業が、必需品を生産する場合、第二は奢侈品を生産する場合である。然るに第一の場合は、結局上記第一の場合と同じ事に歸着する。即ちその第一年は、新事業起設の準備に費やされるが、第二年には三百五十人の労働者が新たに生活必需品を生産し始める。「ところが九百人の労働者はその賃銀の不足の爲めに、従來の職業に停まつて居る、もとの四百五十人の労働者の生産物を丈けしか買ふ事が出

來ぬ。今この三百五十人が提供するものは、彼等が如何にそれを消費し度くても、彼等には手が届かぬ、彼等はそれを買ふべき資力を持たないのである。併乍ら三人の企業家は、これを相互に買取ることが出來ぬ。何となれば是等の通常貨物(必需品)を彼等は自ら消費することが出來ぬからである。然らば新に奢侈品生産業が起こされた場合は何うかと云ふに、此場合にも矢張り、生産過剰に陥ることが避け得られない。何となれば新たに生産せられた奢侈品は、三人の企業家相互の外にこれを買取り得るものはないが、その企業家は節約を始めて、百人の労働者の生産物以外、何物をも消費しない約束になつて居るからである。經濟學者の賞揚措かざる節約又は生産的消費は、社會の状態を毫末も改善することが出來ない。「村民は依然として斯う云ふ *ヂレマ* に面して居る。三人の企業家は其収入を最後の一錢まで、各種の幸福及び贅澤に浪費しなければならぬか、其場合には労働者は少くも皆乏しい生活ではあるが兎に角生活することが出來る、或は此奢侈が廢せられ、節約が行はれると共に、販賣が杜絶して、商品が堆積し、労働者が職を失ひ、又従つて生計の途を失ふか、何れかである」(Das Kapital S. 35-45) 是が v. Kirchmann の恐慌説

の要旨である。

(三)

Rodbertus は之を評して謂ふのに、v. Kirchmann の假設例は實際の事實に適合して居ない。元來恐慌に於ては労働者の窮乏と販賣の杜絶との二事實が起るが、Kirchmann の假設例によれば、第一に實際の事實とは違つて労働者の窮乏は販路の壅塞とは無關係に存在するし、第二に販路の壅塞は、Kirchmann が自ら主張する様に、分配の不平等からは生じないで、企業家の誤算から起つて居ると謂ふのである。實際の恐慌に於ては、労働階級の困厄は、販賣の杜絶、企業經營の縮小若しくは停止と云ふことから起るので、賃銀の不足から起るのではない。恐慌に先つては、却て比較的賃銀の騰貴するのが通則である。然るに上記の假設例に於ては、労働者は始めから、賃銀の低率なるが爲めに窮乏して居るのであるから、假令販路壅塞が罷んでも、即ち資本家が不要なる尋常貨物の代りに、他の彼等自ら使用し得べき貨物を生産せしめても、窮厄は依然繼續するであらう。何となれば是に由て生産物に對する労働者の得分の僅小なることは猶ほ變らないからである(S. 45-6)。

次に假設例では、販路の壅塞は所謂「有效需要」以上に、貨物が生産せられることから起つて居る。即ち、貨物が「一方(労働者)に就ては一定の購買力に依て局限せられた需要以上、他方(企業家)に就ては、生理的需要以上に生産せらるゝことから生じて居る。併乍ら Rodbertus の見るところに従へば、これは企業家の迂愚若しくは過失から起つた事で、労働者所得分の僅小から起つたものでは決してない。労働者の所得が如何に乏しくても、企業家が最早何人も買ふことが出来ぬか、又は欲せぬ尋常貨物を造る代りに、彼等自身の使用し得るやうな貨物を造りさへすれば、販路壅塞は起らない。其反對に労働者所得は如何に大きくても、企業家が同じ迂愚過失を犯して、需要「有效需要」のない貨物を生産させる限りは、販賣杜絶は依然として起るのである。即ち假設例では、労働者の窮厄も今日の商業恐慌に於けるが如く、販路閉塞からは生ぜず、又企業家の販路壅塞も貴下「v. Kirchmann」の主張するやうに、賃銀の乏しき事からは起らぬ(S. 50)のである。

さうすると販路壅塞は結局「企業家の迂愚過失」から惹起されると云ふ事に歸着するか。Rodbertus はそれ丈の説明では満足しない。勿論彼れと雖も、今日生産

過剰が此原因から生ずることがあるのを否認するのではない。所謂「迂愚過失」は、企業家の需要誤認を斥すに外ならぬものであるが、それは國民資本が私企業家の手に在つて、而かも市場の範圍は益々擴大し、慾望産業の種類は増加し、生産力の發達する事現在の如くなる限りは、之を避けることが出來ぬ事は、Rodbertusも認めて居る。これを防ぐには、今日の財産制度を根本的に改めて、一切の生産基本(Produktivfonds)を一個の社會的行政機關の手に統一し、其をして凡ての社會的並に個人的欲望の豫算を編成し、それに適應して土地資本を生産上に利用せしむるの外に途がないと謂ふ(5)點に於ては、彼れも多くの社會主義者と同意見である。たゞ更に此企業家の「迂愚過失」の外にも、つと深い必然的な原因があることを認めて居るのが Rodbertus の恐慌説の特色だと云つて好い。而して其原因と謂ふのは、「勞働生産力の増進に連れて、勞働階級の賃銀の國民生産物に對する分前は益々減少する」一事である。

各人の貨物需要力、即ちその貨物の生産を促がし、造られた貨物に販路を供する程度は(Rodbertus 謂ふ)彼れが造るところの生産物量、若しくは彼の生産能率に依ては定まらないで、彼れに對する割當額(Grosse seiner Abfindung)即ち彼れが生産物の價值から受ける分前に由て定まる。而して各個人に就て云はれることは、又全階級に就ても云はれ得る。此の割當て、此分前が大なれば、各人が需要に對し、從て又生産に對して及ぼし得る力は強いのである。ところで企業家は個々の生産の程度を此分前の大小に應じて定めなければならぬ。而して個々の生産の程度が、現在の分前と一致すれば、企業家は其任務を果して、國民的生産は國民的分配に依て是認せられたる(資格を與へられたる)國民的慾望に完全に適合するのである。(5)併し企業家は彼の分前の限界内で止まらうとしても、社會の大多數、即ち勞働者の受ける分前その者が、段々に目に見えぬ、併乍ら不可抗なる力を以て減退したならば何うするか。勞働の生産力は絶えず増しつゝあるが、此増進と歩を共にして、社會大多數員の受ける分前が、常に益々減退し、斯くして何等の過失なくして、企業家脚下の地が崩壊したならば、何うするか。Rodbertus は此事の必至を認めて居る。而して其結果は販賣杜絶の外にない云ふのである。從來の經濟學者は各人の所得を一定貨幣額例へば一日一(Thaler)を以て云ひ現はされて居る、固定量と考

へ、而して勞働の生産力が増進すれば、生産物の價值が低廉になつて、同じ 1 Thaler の所得の内容が豊富になる丈けの事だと安心して居るやうであるが、今日の自由交易の制度の下に於ては、貨物が低廉になると同じ割合を以て賃銀率は低減して、1 Thaler のものは 3/4 Thaler, 1/2 Thaler 若しくは 1/3 Thaler となる。従て大多數者は生産力の増進にも拘らず、大體從來と同量の生産物を消費し、凡そ同數の欲望を満たし得るに過ぎぬ。そこで資本家は單に今迄の分前額に適應して生産の種類分量を決定して居るのに、常に今迄の分前以上に生産すると云ふ結果に陥るのである。故に今日の商業恐慌は、一言にして云へば、社會の何れかの階級の罪ではなくて、自由を放棄せられた交易に特有不可變の隨伴物である。それは生産力は如何に増進しても、國民生産物に對する分前の賃銀を以て成立つ部分は、漸次同じ割合を以て下降すると云ふ、現國民經濟組織の著しき欠陥に由て惹起される慢性的疾患の發作である。それ故に不斷の生産力増進と共に、現社會に於ける不斷の不満足が生じ、販賣困難並びに勞働と窮厄との不斷の争鬭なる慢性的疾患が生ずる。さて此困難が二三年愚圖々々曳ずつて來ると、恐慌が破裂して、現在産業の生産力が個

々人の分前に對して甚しく權衡を失し、其結果として、斯る發作の劇しさを抑へ、單に交易を元の慢性的虚弱の状態に復せしむる爲めに、勞働者に於ける幾月の欠乏と饑餓と、資本家に於ける其資本の大部分の破壊とを必要とするのである。(S. 63) 畢竟恐慌は生産と需要との不適合から起るものには違ひないが、Rodbertus は是を企業家の「迂愚過失」と云ふやうな、謂はゞ偶然の原因に歸せずして、勞働生産力の増進に伴ふ、勞働階級得分の減少なる事實がある以上、必然避け難きものであると説明したのである。又、Kirchmann は、恐慌が分配の現在の不平等から起ると云ふ意見であるが、併し勞働者の賃銀が乏しくても、勞働力が奢侈品に向けられさへすれば、之を避け得る事は彼れも容認して居るのであるから、販賣杜絶、従て恐慌は不平等なる分配から必然的に起るものとは云ふことが出來ぬ。此點に於ては Rodbertus の批評を是認しない譯には行かぬのである。

(四)

恐慌は奢侈的生產に依て避けることが出來る。然るにも拘らず、現實世界に於て恐慌の起るのは何故であるかと云へば、それは上述の通り資本家が儉約なるが

爲めである云ふのが v. Kirchmann の説である。併し Rodbertus の見るところを以てすれば、上述の假設例に於て、企業家が所謂「節約」を行ふ場合を見れば、それは畢竟需要のない貨物を生産すると云ふ最初の「迂愚過失」を繰返して居るに過ぎない。即ち奢侈を廢して新生産業を起し、それに依て新たに尋常貨物を生産する場合は勿論、態々奢侈を廢して置きながら、新生産業を起して奢侈品を生産せしめる場合に於ても、共に企業家は何人も欲することなき貨物を生産せしめて居るのである。苟も企業家が態々需要のない貨物を生産せしめると云ふ事を敢てする以上は、國民生産物がもつと労働者に有利に分配せられたところで依然販路は壅塞せざるを得ない。「此種の販路杜絶」に對しては一般に何等の手段もあり得ないのである。併しそれよりも重要なのは、假設例に於ける「貯蓄」が、本來の貯蓄になつて居ない事である。今日その資本利潤の中から貯蓄するものは、現在の資本を他に轉用し、又は全くこれを破壊することなくして、必ずその資本財産 (Kapitalvermögen) を増殖する。舊來の資本からは今迄通り利潤を得つゝ、猶ほ其上に新なる利潤を收めようとするのである。成程投資の途を誤つて、新なる利潤を收めることには成功しな

いかも知れぬが、併し舊來の資本丈は、少くも之を現状の儘に維持しようとするのである。然るに v. Kirchmann の村で貯蓄と云ふ時には、全く何等の資本増加はなくて、たゞ(第一の)通常貨物が生産せらるゝ場合には、從來の資本の一部が、從來の生産から引出されて、新生産業に投下せられ、而して需要者のない通常貨物の生産に供用せられると云ふに過ぎない。v. Kirchmann は明かに三人の企業家は僅かに百人の労働者の生産物のみを消費するに止め、残る三百五十人の労働者の労働力を、彼等が使用する資本と共に「新生産業」に於て投用すると記して居るのである。

v. Kirchmann は「残る三百五十人の労働者の労働力を、彼等が使用する資本と共に、新生産業起設の爲めに、zur Anlegung neuer Produktions-geschäfte 投用する」と記して居る。居るのを、Rodbertus は労働力と資本とを直ちに新生産業に轉用するものと解釋して居るらしい。彼と此との相違は重要だと認められるが、併し今は本文に従つて、彼れの主張のみを紹介する。(これ丈の事ならば、三人の資本家が、從來の生産業から生ずる利潤を棄て、これを他に求めると云ふに過ぎない。又第一の、新設生産業が奢侈の生産に當る場合を見れば、それは奢侈品の生産が繼續せられたゞ

企業家が贅澤家から禁欲家に變つた爲めに、之を消費せずして放置すると云ふに過ぎない。何れの場合に於ても、Kirchmannの「村の貯蓄者は、現社會の貯蓄者とは遙かに異なるのである」(S. 45-70)

そこで貯蓄の本質奈何なる問題に逢着する。而して是に答へる爲めには進んで資本の本質其者を明かにしなくてはならぬ。

外國領海内に於ける商船の地位に關する佛國主義(上)

板倉卓造

一 英佛兩主義

領海とは地球表面の海洋の一部にして一國の主權の行はるゝ範圍を云ふ。(註一)故に其領海内に來る一切の外國商船は其國の主權に服す可きものと云はざる可からず。隨て外國商船は其國の裁判權警察權、稅權等各般の權力に服せざる可からず。殊に犯罪に就ては其行爲が船舶自身に依て行はれたると將た乗組員に依て行はれたるとに論なく悉く領海國の裁判權に服す可きものとするを以て原則と爲す。而して英國は此原則を最も嚴密に支持するを以て一に英國主義(English rule)と呼ぶ。然るに之に對し或種の犯罪に就ては領海國の裁判權に依て管轄せしめざるの主義を採るものあり。佛國が最も古くより之を行ふを以て佛國主義(French rule)と稱せらる。